

## 新工場建設は「一体化」も目的

▽：しかし、両工場にはどうしても無視できない差がある。それは、同じようにレベライオンを2基保有している中

▽：(大阪) JFE商事ブリキセンター(大阪府大東市、清末浩史社長)は松原工場の集約を含めた新工場の建設計画を現在進めているが、この投資の一番の目的は加工トン数の拡大ではなく工場現場の安全性を高めることや作業効率性、品質レベルを向上させることだという。しかし、この投資にはもう1つ大事な目的がある。それは元々の文化が異なる本社工場と松原工場の垣根をなくして、名実ともに一体化することだ。

▽：同社は、JFE商事大阪ブリキセンターと新キヨイ鋼業が統合してできた会社で、現在の本社工場はブリキセンター、松原工場は新キヨイのそれぞれ加工センターだった。その違いを見ると、直近ではブリキセンターが商社系で新キヨイがオーナー系、所在地はブリキセンターが大阪府北部で新キヨイが大阪府南部、向け先分野はブリキセンターが18リッター缶などの工業缶で新キヨイが贈答用などの一般缶だ。共通点とえば、JFEグループと関わりがあることやブリキ・ティンフリースチールを加工していることくらいで、競合すらしない「他人同士」だった。その両工場は合併後も従来通りの事業を進めてきたため、共通点はなかなか見出せなかったのである。

で、本社は2基とも稼働しているのに対して松原は1基が休眠状態、月産加工量は本社が2100―2200トンのに対して松原は500トという差だ。その原因は、工業缶の需要が比較的堅調なのに対して一般缶の需要は紙など代替材の台頭で中長期的に減少しているからに他ならない。そのため「本社が残業している一方で、松原は定時で退社するケースが多い」という状態に陥っており、せっかくの松原の生産能力を持て余す形となっている。その能力を有効活用しようというのが、今回進められている投資の狙いの1つだ。

▽：清末社長は「一般缶の需要がどこまで落ちていくのかはわからないが、もし大幅に落ちてしまえば松原を閉める選択肢しか残って来なくなる。それは松原の社員にとっても言えることで、非常にドライな話になりかねない」と話す。そして、それは対照的に工業缶の需要が比較的堅調に推移していることを指摘しつつ「人員の充足も含めて、そういう堅調な分野にせっかくの能力を活用していきたい。だから、工場が近い方がやりやすいと思った」と、商社マンらしい考え方を示している。新工場の稼働後、同社では1つの目標に向かって2つの文化がより融合・一体化していくことになる。

(末)